

東日本大震災・宮城県南三陸町八王子山の会災害支援隊報告

元木義隆

この度の「南三陸町震災支援活動」に際しましては、会員の皆さまから暖かいご支援を賜りほんとうにありがとうございました。お陰さまでほんの少しだけでも知れませんが、被災された方々に喜んで頂けたように思います。

5月4日の朝、キャンプ地から国道172号線を通って志津川市内に向かう途中で見た、沢を埋め尽くす家屋の残骸や漁具、ペシャンコになった車、流れ着いた漁船などを目の当たりにしたときのショック、それは今まで見てきた映像や紙面から感じてきたものとは全く違う、あまりにも悲惨な現実には言葉がありませんでした。

やがて入った志津川市内の光景は、まるで写真で見た原爆投下直後の街の様子そのものでした。地表に残っているのは鉄筋コンクリートの建物か骨だけになった鉄骨構造物だけです。「情け容赦なく根こそぎ‘さらっていった’・・・」と云う表現がぴったりきます。人影もなく、動いているのは自衛隊の重機と行方不明者を捜索する自衛隊員や消防・警察の姿だけです。



[何も残っていない志津川地区の様子]



[多くの殉職者を出した防災対策庁舎]

1日目は歌津地区にある曹洞宗の安養山「西光寺」というお寺の瓦礫清掃を他のボランティアさん達と一緒に行いました。180年の歴史を持つ本堂は跡形もなく、山の斜面に造られた墓地だけ残っておりました。墓地に立つと歌津の静かな海が輝いて見えるのですが、“津波”が押し寄せて来たとは俄かに信じられないほどの高さです。

仕事が終わってから、住職さんから心の籠った感謝のお言葉と心境をお聞きし、また、お参りに見えられた檀家（もちろん被災者）の方々からの感謝の気持ちも伝え聞きましたときには思わず涙ぐんでしまいました。



[震災前の西光寺本堂]



[本堂の跡地で住職から話を伺う隊員]

2日目の志津川地区の水尻川上流にある農家の畑に散らばる瓦礫と泥の清掃を行った時に、農地の持ち主さんから非常に興味深いお話を聞きました。「今から千年以上も前にも大きな津波があり、その時に大きな船が流されてきた」との言い伝えが残っているそうです。船が流れ着いた場所は〈入大船沢〉という地名となって残っていました。今回の津波到達地点から、まだ4～5百メートルも上流でした。この地震は869年にあった「貞観地震」と考えて良いのではないのでしょうか・・・。

この地の宿命とも言える、繰り返される悲劇が深く心に刻み込まれた一日でした。

3日目はボランティアセンターで『思い出探し隊』と呼ばれる、自衛隊や消防・警察などがヘドロの中から回収してきた泥水に汚れた写真やアルバムの洗浄を行いました。どうしても写真に目がいてしまいます。ご家族で写した写真、結婚式の写真、可愛い子供さんたちの写真など・・・、とても冷静な気持ちでいられないものがありました。今は、綺麗になったアルバムが持ち主のもとに無事届くことを願うばかりです。



[写真洗浄の様子です]



[なかなか神経を使う仕事でした]

長くなって申し訳ございませんが、この度のボランティア活動を通じて感じたことを一言だけ申し上げたいと思います。

戻って参りましてから日が経つに従い、目の当たりにした悲惨な光景や被災された方々のご様子やお聞きしたお話などが頭のどこかにあり、未だに心の奥に重くのしかかるものがあります。

そして、民間のボランティア活動の限界を感じたように思います。やはり、国を挙げて、日本国中が力を合わせて一つになって、それも息の長い支援が必要であると痛切に感じた次第です。

そのような時、天皇皇后両陛下が南三陸町歌津地区をお見舞いされたとの新聞記事を目にしました。歌津の街に向かって黙祷をささげている写真が載っておりました・・・。

両陛下のご公務のこと、ご年齢のことを考えますと、一人の国民として感謝と感激と共にほんとうに頭の下がる思いでございます。

南三陸町の皆さまもきっと励まされ、希望と勇気を頂いたことでしょう・・・。

一日も早い復興を願いつつ報告を終わられて頂きます。